

はなのきぎた

花の木北遺跡 (本発掘調査B)

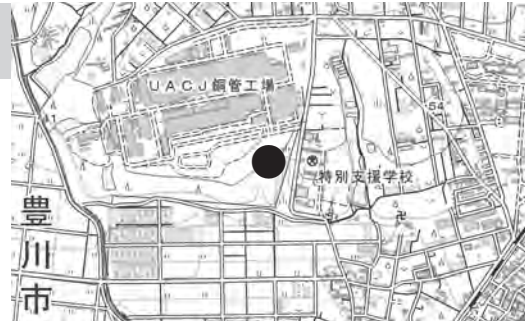
所在地 豊川市大木町新道
(北緯34度51分34秒 東経137度24分48秒)

調査理由 一般国道151号(一宮バイパス)

調査期間 令和4年10月～令和5年3月

調査面積 1355㎡

担当者 樋上昇・池本正明



調査地点 (1/2.5万「新城」)

調査の経過 調査は愛知県建設局道路建設課(東三河建設事務所)による一般国道151号(一宮バイパス)に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。遺跡は令和元年度に実施した本発掘調査Aにおいて新たに確認されたもので、令和3年度には愛知県埋蔵文化財センターが2110㎡の本発掘調査Bを実施している。

立地と環境 遺跡は豊川市の北部で、平成18年に豊川市に合併した宝飯郡一宮町のエリアに該当する。地形的には西原大地と呼ばれる本宮山山麓から広がる扇状地の末端部分に所在する。周辺の遺跡を概観すると、小規模な谷を挟んだ南側には花の木古墳群・花の木遺跡が立地している。これらの遺跡は令和2年度に愛知県埋蔵文化財センターが本発掘調査Bを実施し、花の木遺跡は弥生時代中期～後期の集落遺跡、花の木古墳群は古墳時代中期前半を中心とする古墳群であることが確認されている。また、遺跡の東側には近接して宝陵高校遺跡、南東0.7km程度先には鎗水A遺跡などの弥生時代の遺跡が周知となっている。

調査の概要 本年度の調査区は令和3年度の調査区に接した北側に位置する。面積は1,130㎡、遺構検出面は北～南に向かう緩やかな斜面となっており、標高は50～49m程度となる。調査により検出できた遺構は、昨年度調査区から続く弥生時代中期と古墳時代中期の居住域となる。確認できた主な遺構は、竪穴建物・土坑・溝などがある。

次に遺構数に着眼すると、古墳時代中期の遺構が多く確認できた状況で、竪穴建物は昨年度南半分を調査した1棟と新たに検出した4棟が当該期に属する他、多数の土坑が検出されている。また、調査区の北東部分では幅約7m程度の溝が確認されている。東側は調査区外へと伸び、西側は攪乱により消失するが、端部は調査区内に存在していたものと考えられる。これに対し弥生時代中期の遺構は希薄で、昨年度南半分を調査した竪穴建物の他に、若干の土坑が確認できたのみとなる。

まとめ 本年度の調査区は昨年度調査区とほぼ同様の成果を得る事ができた。遺構の継続時期や内容から、小規模な谷を挟んだ南側に所在する花の木古墳群・花の木遺跡と有機的な関連性をもつものと考えられる。

弥生時代中期の遺構は希薄となる。分布状況からは今回の調査区が弥生時代中期の集落遺跡の北限となっている事が予測できる。一方、古墳時代中期の遺構は、遺構数も昨年度調査区より密度が濃い。こうした状況から、古墳時代中期の集落域は、平坦面がさらに続く北側へと広がるものと予測できる。(池本正明)



調査区 全景



遺構配置図 (1:500)